

1

2023

三重病院

ニュースレター

2023

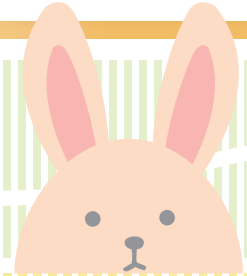
news letter vol.276

- 01 年頭のご挨拶:2023
- 02 新年のごあいさつ
- 03 新年のごあいさつ
- 04 新年のごあいさつ
- 05 新年のごあいさつ／世界糖尿病デー
- 06 病院からのお願い
外来診察のご案内



年頭のご挨拶

国立病院機構三重病院 病院長 谷口 清州



2023年の年頭に際してご挨拶申し上げます。
 新型コロナウイルス感染症(Coronavirus Disease 2019: COVID-19)のパンデミックも3年がたち、12月からの流行は第8波となっています。ウィズ・コロナと良く言われますが、現在の死亡者数は予測死亡数を持続的に上回っています(超過死亡と言います)。急性期における死亡のみならず、いわゆる中長期的な影響としての後遺症についてもこの3年間で多くのエビデンスが積み上げられており、急性期は軽症であったと言って楽観できるわけではありません。我々は現在、この数十年に一度の出来事に居合わせており、二度と出来ないような経験をしています。我々はこれをきちんと評価して次世代につなげて行かねばならないと考えます。



今回のCOVID-19パンデミックで日本が学んだことは、やはり健康危機管理のあり方でしょう。これは私の専門分野ですが、感染症対策に必要な情報を集めることをサーベイランスと言います。世界の状況を調査すると、どこの国でも明文化されたサーベイランス戦略というものをもっていますが、残念ながら日本には明治時代以来の届出一本槍で、そもそも感染症法にはサーベイランスという概念がありません。サーベイランスと

いうものは、当然のことながら、全体の対策のゴールを設定して、それに至る戦略を考え、その戦術を実行するのに必要な情報を収集し、またその情報から対策の効果を評価することを基本として設計されるものです。つまり、日本にサーベイランス戦略がないということは、そもそも日本にどのようにこのパンデミックと戦っていくかという戦略がなかったということであり、これが今回の日本の場当たりの対応の根本であるわけです。



平常時に出来ないことはパンデミックの混乱時に出来るわけがありません。やはり常在戦場、平時から危機管理を考えておく必要があるものと考えます。医療の逼迫というのは今回のパンデミックの課題のひとつでしたが、これは今後も続く可能性があります。医療機関というものは個人ひとりひとりの健康と命を守り、引いては地域全体の健康を守るものであり、本来収益主義であってはならないと個人的には考えています。しかしながら、現在医療機関は収益が優先され、当院は今回は三重県全県の小児COVID-19患者の入院を受けましたが、病院全体の患者数は減少しました。もちろん全体の患者数が減少すれば収益は落ちます。即座に国立病院機構本部

